

深沢 亮子 | ピアノ *Ryoko Fukasawa*

12歳のとき全日本学生音楽コンクール小学生部優勝、文部大臣賞を受賞、15歳で第22回日本音楽コンクール首位受賞、17歳でウィーン国立音楽大学に留学、1959年同校を首席で卒業、翌年、ウィーン楽友協会プラムス・ザールにて海外デビューリサイタルを開催し、絶賛される。1961年ジュネーブ国際音楽コンクールで最高位入賞(1位なしの2位)。以来ヨーロッパの諸都市や南米、アジアの主要都市でリサイタルや室内楽、オーケストラとの共演等国際的な舞台で活躍。(共演した指揮者はL.v.マクチャッチ、G.ヴァント、H.ヴァールベルク、小澤征爾他、オーケストラはN響、東響、N.O.トーキョー管弦楽団、読売日本交響楽団他、室内楽は新・旧ウィーン八重奏団、ブリュッセル管弦四重奏団、シュタイア音楽四重奏団他)日本の作品も内外に数多く紹介する。また、度々ウィーンのパートヴェン国際ピアノコンクール、日本音楽コンクール他の審査員を務める。著書、CD多数、毎年リサイタルを開催している

水野 由紀 | チェロ *Yuki Mizuno*

桐朋学園大学を経て、現在同大学研究科に在籍。これまでに宮崎国際音楽祭、JTアートホール室内楽シリーズ等数々のコンサートに出演。2012年、東日本大震災チャリティ公演として飯森範親氏指揮・山形交響楽団と共演、好評を博す。同年、大学在学中ながら(メンデルスゾーン/チェロ・ソナタ 第2番ニ長調 Op.58)をメインとした「Yuki Mizuno」(オクタヴィア・レコード)にてCDデビュー。本作はのびやかな歌心と丹念な表現で高い評価を得、クラシックの新人演奏家の作品としては異例の売り上げを記録した。2013年、大曲(シューベルト/アルペジオオーネ・ソナタ 短調 D.821)を主軸に据えた演奏としてセカンドアルバム「アルペジオオーネ・ソナタ」(同上)をリリース、JTアートホール アフィニスにて記念リサイタルも開催。各音楽誌・新聞に取り上げられ、若手実力派チェリストとして確かな評価を得るとともにその将来に大きな期待

池田 直樹 | バス・バリトン *Naoki Ikeda*

東京芸術大学首席卒業、同大学院修了。中山隆一、小島政博、ハンス・ホッターの諸氏に師事。第10回東京国際音楽コンクール第2位受賞、第7回ジロー・オペラ賞受賞。1980～81年、文化庁芸術家在外研修員としてミュンヘンに留学、NHK「きょうの料理大賞1999」で部門第1位を受賞。著書：「声の力」河合雄雄、坂田寛夫、谷川俊太郎氏との共著(岩波書店)

二期会オペラ劇場公演では、「フィガロの結婚」のフィガロ、「コシ・ファン・トゥッチ」のドン・アルフォンゾ、「ドン・ジョヴァンニ」のレポレロ、「魔笛」のザラストロ等のモーツァルトの作品や、「ローエングリン」の国王ハインリッヒ、「タンホイザー」の領主ヘルマン、「ジークフリート」のヴォータン、「ニュルンベルクのマイスタージンガー」のボグナー等、ワーグナーの作品にも重要な役で出演した。他、「こうもり」「メリー・ウィドー」「チャールダーシュの女王」等の、オペレッタの公演に於いては、軽妙な演技で喝采を浴び、さらに「ホフマン物語」「真夏の夜の夢」の公演でも存在感を示し、主要な役柄を見事に演じ分け評価は高い。新国立劇場公演では「アラベラ」「マノン・レスコー」「トスカ」「夕鶴」「沈黙」「マノン」「ドン・キホーテ」「ドン・ジョヴァンニ」「椿姫」「セヴィリアの理髪師」に出演し、我が国オペラ界では欠くことのできない存在である。

独唱会も、1976年のシューベルトの「冬の旅」を最初に、同じくシューベルト

小林 道夫 | ピアノ・チェンバロ *Michio Kobayashi*

東京藝術大学音楽学部楽理科卒業。在学中より伴奏者として活動を始め、1956年毎日音楽賞新人奨励賞を受賞。この頃より中山隆一氏の伴奏者に選ばれ、ドイツ音楽について同氏より徹底した訓練を受けた。1960年前後から、来日した世界的な音楽家たちとの共演が始まり、特に伴奏者としての活動は、世界的な伴奏者であったジェラルド・ムーアに比肩するまで言われている。現在までに、声楽では、ヤノヴィッツ、アメリグ、マティス、デ・ラ・カーゼ、オジェー、ヘフリガー、シュライヤー、エクヴィルツ、ヒュッシュ、フィッシャー・ディスク、ブライ、器楽では、ランバル、ヴェラー、ニコレ、グラーフ、ラルデ、ラリー、コッホ、ホリガー、ダム、スーク、シルヴァースタイン、ヘッフェル、ヘルンシャー、ベッチャー、フルニエ等の芸術家たち、また、カラヤン指揮のベルリン・フィルハーモニー、ミュンヘン管弦楽団のシュトゥットガルト室内オーケストラとステージをともにしている。また、年末に行っているJ.S.バッハの「ゴルトベルク変奏曲」のコンサートは、恒例になっており根強い人気に支えられて既に40回を超えた。1965年北西ドイツ音楽アカデミー(アトモルト市)に留学、チェンバロと室内楽を学び1966年秋に帰国後は、鍵盤楽器奏者、室内楽奏者、伴奏者、また、指揮者として極めて多方面にわたって活躍している。1970年第1回島井音楽賞(現在のサントリー音楽賞)を受賞。1972年ザルツブルク国際財団モーツァルトウムより記念メダルを受けた。1979年モービル音楽賞を受賞。国立音楽大学大学院教授、東京藝術大学客員教授、大阪芸術大学大学院教授を経て、現在は大阪府立芸術文化短期大学客員教授。

が、特に2003年、2004年にデビュー 50周年記念、2009年にはデビュー 55周年記念演奏会を開催。又、2013年、デビュー 60周年は2台ピアノと連弾作品による演奏会を行う。2005年、デビュー 50周年記念CD(ナミ・レコード)をリリース。2007年と2009年に、恵藤久美子(ヴァイオリン)、安田謙一郎(チェロ)両氏と「深沢亮子と室内楽の仲間たち」I・II(同)をリリース。2011年に、藤井祥子(クラリネット)、生沼晴嗣(ヴィオラ)、アダルベルト・スコッチ(チェロ)諸氏と「楽に寄す〜街の歌〜」(アート・ユニオン)、中村静香氏(ヴァイオリン、ヴィオラ)と「シューベルトティアード ふたたび」(同)をリリース。英国ケンブリッジ国際記念センター(IBC)により「最も優秀な100人の音楽家」に選ばれる。日本演奏連盟理事、日本音楽舞踊会代表理事、公益財団法人国際開発教授財団会員、1963年大阪府民劇場奨励賞、1995年千葉県文化功労者、永井進、G.ヒンターホーファーに師事。

を寄せられた。2014年には、ヤマハホール コンサートシリーズにおいて2月に恩師である梶原氏と共演し好評を博したほか、11月には「古川眞生 Produce スーパー・チェロ・アンサンブル」にも日本を代表するチェリストの1人として出演。また関西フィルハーモニー管弦楽団にゲスト首席として度々招かれているほか、12月には飯森範親氏指揮・日本センチュリー交響楽団と協演し(ハイドン/チェロ協奏曲第2番ニ長調 Hob.VIIIb-2)にてソリストを務める。ソロ・室内楽・オーケストラ等、一層意欲的に活動の幅を広げている。これまでにチェロを梶原氏、菊地知由氏に、室内楽を徳永二男氏、藤井一興氏に師事。島島国際音楽賞受賞。可憐な中にも凛とした輝きを放つ、クラシック音楽界期待の若手実力派チェリストである。

水野由紀 1002オフィシャルサイト <http://www.1002.co.jp/yukimizuno/>

の「白鳥の歌」、シューマンの「詩人の恋」等で回を重ねている。また、在京、地方の主要なオーケストラに招かれ、多くの宗教的作品や、ベートーヴェンの「第九交響曲」等の独唱を務めた。オペラの制作者としても「サムソンとデリラ」「奥娘女中」「魔笛」「道化師」等の作品を手掛けた。演出家としては「チャールダーシュの女王」「フィガロの結婚」の二期会オペラ劇場公演、さらには「コシ・ファン・トゥッチ」の新鮮な演出で話題を集めた。さらに演奏会のプロデューサーとしては、2002年にサントリー・小ホールでの「二期会創立50周年記念・30日連続演奏会」を成功させたほか、「100曲リクエスト・コンサート」「オペラ事件簿」「お代は見ての御通り」などの独創的な企画でも注目を集めている。この他、1992年にシアターコクーン制作シェイクスピア「夏の夜の夢」で精霊の王オーベロンを演じたのを最初に、俳優として演劇公演にも積極的に参加し、2004年には、新国立劇場制作「表裏の似合うエレクトラ」(朝日舞台芸術賞グランプリ受賞)に出演するなど活躍の場を広げている。また、梶原氏のプロデュースによるオペラ公演では「ドン・ジョヴァンニ」2006年(レポレロ)、「愛の妙薬」2009年(ドゥルカマラ)、「セヴィリアの理髪師」2012年(パジリオ)の全国公演に参加し喝采を浴び、2015年3月の「後宮からの逃走」にも出演が決まっている。日本大学芸術学部教授、二期会会員。



紀尾井ホール

東京都千代田区紀尾井町6番5号 TEL.03-5276-4500

- 「四ツ谷駅」徒歩6分
- 「麹町駅」徒歩8分
- 「赤坂見附駅」徒歩8分